

ブリューゲルの「子供の遊戯」

7

——喫タバコ転がりから冒ひの鍋たたきまで——



森 洋 子

39、喫タバコ転がり Tabak rollen (図一)

「子供の信念をぐらつかすことができるものはない。……今もつきまでお城にみたてて

攻撃していたイス、竜にみたててみごと地上に切りたおしたイスが、お客様のために持つていかれて、けろつとしている。備えつけの石炭いれを相手に、何時間でもやりあう」とがである。^(注1)

(R・L・スティヴァンソン『若い人たるものために』)

画面の左中景にレンガ色の柵があり、その中の芝生で三人の子供たちが遊んでいる。いずれも自分自身の身体を使っての「アクロバット遊び」のようである。芝生に坐っている男の子の遊戯を、ド・マイヤーの表記^(註2)に従い、Tabak 「喫タバコ」と訳したのは、子供のボーズが喫タバコの形を連想させるからである。しかし当時、タバコがフランドルでも民衆に普及していたかは、もつ

と厳密に調べてみなければならないだらう。ヨーロッペ

では一五五八年じるボルトガルでタバコが栽培されたといわれるが、フランドルに近いフランスでは、一五五九年、マルバタタバコの種子と葉が、初めて医薬用として

国王アランソワ二世夫妻に献上されたといふ。^{註3}したがつ

てブリューゲルの「子供の遊戯」の制作された一五六〇

年に、「噛タバコ」がそれほどボローラーであつたかど
うかは疑問である。G・グリュックのよう^{註4}に、「頭から転
がる」kopje duikelen, buitelenといった方が無難かも

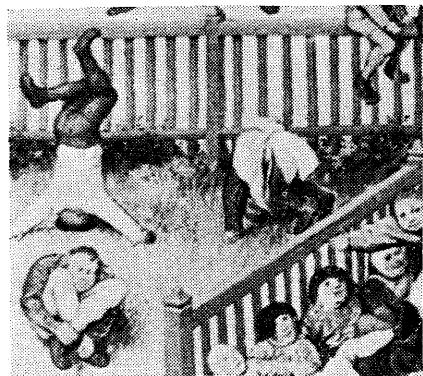


図1 ブリューゲル「噛タバコ転がり」「梨の木になる」「宙返り」(「子供の遊戯」の部分③④⑤⑥)

しれない。

遊び方は、まずしゃがんで両脚を交差させ、右足首を左手、左足首を右手でしつかりもつ。それから頭を両脚の間に深く入れ、草の上に転がるのである。

40、梨の木になれ(海苔やわらい) Pereboom staan (op dem kop staan) (図1)

この遊びはラブレーの『ガルガンチュア物語』第二十
二章に「逆立ち」au poirierと記述されているが、おそ
らく世界の子供たちの知っている遊びのひとつである
。ただし逆立ちをしたとき、子供たちが何のイメージ
を表象しているかが少し違うのである。フランドルで
は、この逆立ち「こを「梨の木」と呼び、子供たちは
地面についた両手や頭を木の根元、両足を木の枝に模し
ている。ほかに、十六世紀の言語学者キリヤーンはその
辞書の中で「踵をもみに」Hille-billenという名称を与
えている。確かにこの画面での少年も足をバタバタさ
せ、踵をもみにあてていね。

十七世紀のドイツの詩人ヤコブ・フォン・デル・ハイデン（一六三二年）の作品では、この「逆立ち」についてこう記されている。

「あそこで二人の少年が逆さになつてゐる、足を山の方に、頭を地面に、いま、両手で歩こうとしている。」

同じく十七世紀のオランダの道徳思想家で詩人のヤコブ・カッツは、「逆立ち」を人生への警鐘として、こう寓意的に語つてゐる。

「みてごらん、少年たちが逆立ちをしている、両足を上にのばして。君よ、これは何を意味するのか、聞いて

ごらん。そこからこんな道徳が引き出されるのだ。われわれといふのは、あたかも理性を失つた者が頭で地面を掘り、最高善（つまり神）に対して、踵以外の何ものをも与えない、そういう人間なのだ。」^{注6}

カッツと同時代のフランドルの詩人ジャック・ステラはそのフランス語の詩集『子供の遊戯と楽しみ』（図2、一六五七年）の中で、ピタゴラスを引用しつつ、こう楽しげに謳つてゐる。

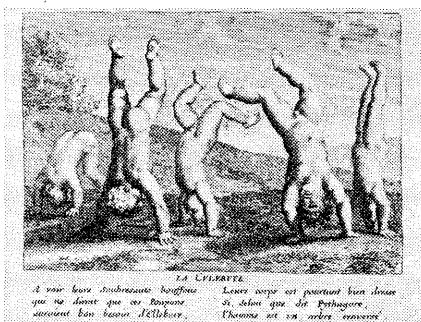


図2 クローディン・ブゾネ・ステラ「でんぐり返し」（ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1675年より）銅版画

カッツの詩の挿絵画（図3）や十七・八世紀のタイル画（図4、図5、図6）にも、逆立ちをする少年たちの生々とした姿が画かれている。とくにタイル画では、これから始めようと身体をかがめたり、倒れないよう仲

間が身体を抑えたり、樂し氣な雰囲気があふれている。



図5 「逆立ちごっこ」 17世紀後半
のオランダのタイル



図3 E.シリマン「逆立ちごっこ」
(J.カット『結婚について』1642
年より) 銅版画

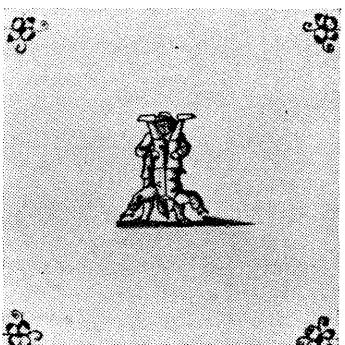


図6 「逆立ちごっこ」 17世紀後期
のオランダのタイル



図4 「逆立ちごっこ」 17世紀中期
のオランダのタイル

41. 両返り Duikelen-Buitelen (図一)

柵内の第三の少年は、両手を地面に、頭を下げて今までに宙返りをしようとしている。ブリューゲルはここで、子供らしい身体のしなやかさを見事に表現している。なおこの遊戯の別称として、キリヤーンの辞書には「倒れる」 *tuymelen* とか、「尻尾を転がす」 *steertebollen* という表現がある。もちろん“尻尾”というのは人間の尾骶骨のことだ。同じく宙返りの意味であろう。

42. 犀の上にOver 't Hekken kruipen(図二)

ひとりの少年が柵を越え、前方にいる三人の仲間 (43

参考) に加わろうとしている。しかし、ハルトマンと

ンスは、この少年が芝生の三人のアクロバットたちと遊ぼうとしていると推定しているが、いずれかは断定できない。

43. 犀の上の馬乗り遊び Paardje rijden op het Hekken (図三)

三人の少年が柵の上に馬乗りになつて、前方へと進んでいく。そのうち二人は手に鞭ならぬ棒をもつて、掛け声をかけている。一番目の子供の帽子が顔を深く隠しているのも、いかにもブリューゲルらしい手法である。洗礼行列でスカートを頭巾代わりにする女の子、26の豚の



図7 ブリューゲル「柵をよじ登る」(「子供の遊戯」の部分⑦)



図8 ブリューゲル「柵の上の馬車の遊び」(「子供の遊戯」の部分⑧)

膀胱をふくらませる女の子、29のお店屋さんごっここの女の子など、画面では、頭巾や帽子で顔を隠している子供の例が少くない。こうした「無名性」「匿名性」はブリューゲルの画面全体の特色ともいえるのである。

ところで、馬乗りは男の子たちのもつとも愛好した遊びのひとつで、彼らは幼少時代、父の膝の上でそれを始めた。筆者の知人でベルギー人のグローラス博士は、祖父がフランス語でこう歌いながら、よく膝の上での馬乗り遊びをさせてくれた、と語られた。

「パパの上で馬に乗る、初めゆっくり、だんだん早く、
それからギャロップで走る……。^{注9}」

44、花嫁行列ごっこ Bruidstoet (図9)

画面のはば中央で、二つの対角線の交差する位置に、この「子供の遊戯」全体のハイライトともいべき「花嫁行列ごっこ」がみられる。花嫁は黒い服を着て、髪を両肩にたらし、頭上に冠を被っている。この冠と髪型は十六世紀のフランドルの花嫁のスタイルだつたらしく、



図9 ブリューゲル「花嫁行列ごっこ」(「子供の遊戯」の部分⑩)

ブリューゲルの銅版画「野外の農民の結婚式の踊り」(図10)や「農民の結婚式」(図11)また同時代のピーテル・バルテンスの版画(図12)にも、同様な髪型がみられる。

ところでJ・ヒルズは花嫁の右側にいる赤い服の男の子が花婿か、あるいは彼と花嫁の左側の女の子は、両親ないし代父母の役をしているのかと述べている。しか



図11 ブリューゲル「花嫁」（「農民の結婚式」の部分）ウイーン、美術史美術館 1568年頃
油彩



図10 ブリューゲル「花嫁」（「野外の農民の結婚式の踊り」の部分）1566年頃 銅版画



図12 ピーテル・パルテンス「婚礼の夜」16世紀後半 銅版画

し、筆者は、後者の説の方が正しいように思われる。ピートル・ブリューゲルの「結婚の行列」（図13）にみられるように、当時の習慣では教会への村道を、花嫁側と花婿側が別々の行列をなして進んでいくが、結婚するカップルは一緒に並んで行列するのではないのである。

この画面では二人の幼い女の子が籠に花をいっぱい入れて、道に撒きながら、花の絨毯を作っている。他に数人の女の子たちがスカートのすそを頭巾代わりにたくし上げ、行列に加わっている。興味深いのは、子供たちの行列の後ろにこの画面で例外的といえる大人（他に中央のパラッソ風な建物の横の出口から、ひとりの大人の女性が壺から水を撒いている）がみられるが、おそらく花嫁役の女の子の母親かもしれない。花嫁の着る衣装がダブダブなのは、母親の大切な衣装を借



図13 小ピーテル・ブリューゲル「結婚式の行列」ブリュッセル 市立美術館
1630年頃 油彩

りたのであろうか。

スペイマー^{注11}はこの行列を「五月の花嫁のグループ」と解している。これは秋の収穫を祈念する春の行事のひとつで、人びとは主の昇天の日（復活祭から40日目）に、花や若枝をもち、戸口から戸口へと撒き、花嫁を迎える天したキリストへの畏敬を表わすのである。

しかしブリューゲルの絵では、既述したように中央の女の子の衣装や髪型、冠から、「花嫁行列ごっこ」であることは間違いない。五月の花嫁は一般に花輪を髪につけ、供者たちが若枝をもつただが、ここでは誰もそれをもっていないからである。

しかし、G・C・ストリッドベック^{注12}は中世での「花嫁」はつねに象徴的な意味を有してきたことを強調し、とくに旧約聖書の「雅歌」では教会を「キリストの花嫁」として比喩しているのに注目した。さらにルネサンスやバロック時代では、花嫁のモティーフは「魂」の寓意となり、「花嫁行列」は「人生」の寓意像となる、という。とくにこの行列がブリューゲルの画面の中央に位置して

いるのは偶然ではなく、この絵そのものが「世界像」の寓意画とも考えられる、と主張している。

45、盲らの鍋たたき Blindpotten (図14)

帽子を目深にかぶり、目隠しした少年が棒をもって慎重に鍋にむかって歩いていく。彼は鍋を中心にして三回廻らねばならない。それから同じく三回、鍋たたきを試みることができる。他方、仲間の少年はナイフで逆さになつ

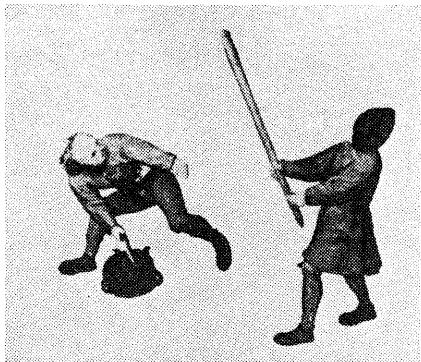


図14 ブリューゲル「盲らの鍋たたき」
(「子供の遊戯」の部分⑤)

た鉄鍋をたたきながら、音でそのありかを教える。盲ら鬼が鍋に近づくと、仲間が「熱いぞ」と叫び、その位置を暗示する。

ドローストの研究^{注13}によると、当時は「鍋たたき」よりは「卵割り」の方がポピュラーだったという。大市や何



図15 クローディン・ブゾネ・ステラ「壺割り」(「ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1675年より) 銅版画

か愉快な祭りの時、紐からぶら下がったり、また地面に

置かれた卵を田隠しそれた大人たちが棒で割り、興じた

ところ。^{注14} ロックとテーリングも「盲心の卵割り」 Blind

ei slaan を田タイトルとして、「盲心の鍋」 Blindpot や

副タイトルとして列举している。その場合、紐がひもい

ちがつた土製の鍋をたたき割る、というのが遊びの目的

となる。

この遊戯は今日でもイタリアの農村地帯で若者の人気ゲ

ームのひとつである。田隠しそれた者は、二十歩位離れ

たところから、目的物に向うのだが、多くの場合、生き

た鶏を鍋の下にかくすので、「鶏打や」などと呼称され

る。なお十六世紀のドイツの詩人ヨハン・ハイシャルト

は「壺割り」 Brich den Hafen とか、「桶の中の壺割り」

Teller im Kubel abschlagen などと表現しているが、

これはラブレーの「壺割り」 Au casse pot と同一の

遊戯を言及しているのであら。

なおジャク・ステラの詩でも「壺割り」(図15) が

れているが、そこにはいう語われてある。

「いたずらっ子が走っている、

大胆な男の子がいる、

この子は今、力強く打とうとしている。

多分、この子は濡れるだらう、

いやもつと悪いことに、

割れた壺が彼の頭を怪我させるだらう。」^{注15}

ところで画面に画かれている鍋は、ブリューゲルの版画「やせた台所」(図16) とか「鍊金術師」(図17) にも



図16 ブリューゲル「三本足の鍋」(「やせた台所」の部分) 1563年
銅版画



図18 「三本足の鉄鍋」
(Weyns, *Volkshuisraad in Vlaanderen* 図205より)

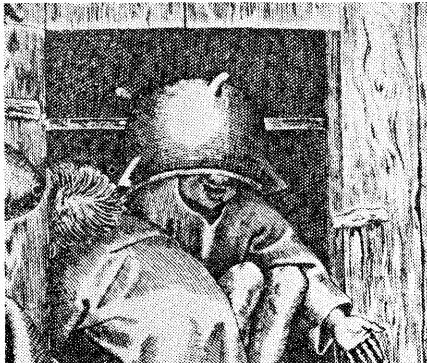


図17 ブリューゲル「空っぽの鍋で遊ぶ子供」(「鍊金術師」の部分) 1558~59年頃 銅版画

みられるフランデルの台所用品である。ウェインの民俗学研究によると、この鍋はペッップ用鍋（ペッップはフランデル独特のお粥の一種）で、三本足 *driebeen* の台（図18）がある。三本脚の椅子と同様、ドーピーの床に置くのに便利なため、三本足があるのだろう。これは十九世纪まで使用されていたが、土製だったのが後に金属製に、そしてふたたび耳形の把手つきの土製鍋が作られるようになつた。

このようにして、ブリューゲルの「子供の遊戯」に道具として登場するわがわがまなフランデルの日常品を見ることができるのである。

（東京工芸大学）

注1 R・L・スティヴァンソン『若い人だらのために』橋口稔訳、現代教養文庫、社会思想社刊。

注2 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklard*, Antwerpen 1941, p. 6.

注3 『世界大百科事典』平凡社（昭和41年）、第14巻、四五八頁。

- 注4 G. Glück, *Das grosse Bruegel-Werk*, Wien, 1955, p. 55.
- 注5 Jakob von der Heyden, 1632, 『畫史』J. Bolte, *Zeugnisse zur Geschichte unserer Kinderspiele*, Bd. XIX, 1909, p. 398 トマス・ブリューゲル。
- 注6 Jacob Cats, *Kinder-spel*, Saint-Omer 1855, pp. 92-93.
- 注7 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 24.
- 注8 G. Hartmann en E. Lens Helle Jol! Amsterdam 1976, p. 114.
- 注9 “à cheval, sur son papa, il va au pas, il trotte, il galope...”
- 注10 Jeanette Hils, *Pieter Bruegel Kinderspiele 1560*, Wien 1957, p. 29.
- 注11 Spaer, *Deutsche Volkskunde* Bd. II, p. 225.
- 注12 C. G. Stridbeck, *Bruegelstudien. Untersuchungen zu den ikonologischen Problemen bei Pieter Bruegel d.Ä.*, Stockholm 1956, pp. 186-187.
- 注13 W. P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel voor de Zeventiende Eeuw* (Dissertation), Leiden 1914, p. 149.
- 注14 A. De Cock en Is Teirlinck, *Kinderspelen en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1903, Bd. IV, pp. 148-151.



〔著者紹介〕
新潟県上越市生れ。一九五九年お茶の水女子大学哲学科卒。西独「ハノバーランゲン大学」留学。結婚後、長女と共に米国アリゾナ州立大学院へ留学。ベルギー政府給費留学生として、次女を伴い王立図書館でブリューゲルを研究。
「ブリューゲルとその時代」(三才社) 及び「ホガースの銅版画」(岩崎美術社) 等の著作がある。

- 注15 Stella, *op. cit.*, №. 10.
- 注16 J. Weyns, *Volkshuisraad in Vlaanderen*, Beersel 1974, p. 418.

原稿の図は回書にトマス・ブリューゲル。